

 書評

岩田 誠, 河村 満 編

《脳とソーシャル》

脳とアート

感覚と表現の脳科学

佐伯 胖

本書の「発刊に寄せて」にあるように、脳科学がこれまで中心的に扱ってきたテーマは、いわば「正解」のある課題を与えての「反応」を測定・評価するというものであったが、「感じること」「表現すること」をテーマにするということは、個人の内面にかかわっており、外的基準による「正解」のない活動に焦点を当てることになる。このような「新しい」研究領域を拓く際には、伝統的な脳科学・神経科学を超えて、他領域との交流が必要となるわけで、本書も、脳科学・神経科学の専門家ばかりではなく、知覚心理学や感性心理学の専門家、発達心理学者、健康科学の専門家、ロボット工学者、システム科学者らも執筆陣に加わっており、そのような他領域との交流からの新しい研究領域を拓こうという意気込みが感じられる構成となっている。

本書の章立てを見ると、色彩感覚、「香り」や「味覚」、音楽、絵画、さらには「遊び」など、まさに、「正解」のない活動を中心テーマに掲げているのだが、これらのテーマの下で実際に探求されていることのほとんどが、「特定の課題を与えたときに、脳のどの部位が活性化するか」、「脳のどの部位に障害があると、どういう“歪められた”行動が発現するか」という、まさに伝統的脳科学のパラダイムの中での「原因追及型」の研究がほとんどである。これは脳科学・神経科学は伝統的に「局在論」の立場から、「〇〇という反応が生まれるのは、脳のどこが活性化することによるか」を分析的に解明するというのがメインストリームの研究であって「それ以外のやり方が考えつかない」のかもしれない。

しかし、「疾走する赤いアルファロメオ」の写真を認知するとき、「赤いアルファロメオ」を認知する脳の部位と、「〇〇が疾走していること」の認知が全く別の部位であることがわかって、まさに「疾走する赤いアルファロメオ」の写真を「アート」としてワクワクしてみる（「カッコいいな」と感じる）のは、脳の中でどのような処理が行われるのかわからない。それは、おいしい料理をあれこれ分析して材料や調理過程を分析しても、料理人が見事に創り出した、まさに職人芸（アート）としての「料理」そのものが解明されていない、ということと似ている。

この問題は、脳のさまざまな部位で分析的にとらえられている神経活動全体を脳自体が統括する（単に「まとめる」のではない、調理人のように「見事に調製する」）働きをする脳の神経活動を解明しなければならないということである。これは本書で「描く脳——絵を描くロボット」の執筆者たちが「絵を描く」ということは「自ら描いた絵を評価（鑑賞）する」機能を持つこと、つまり、ロボットが自意識（魂）を持つことであり、これこそが今後の最大の課題であるとしていることにも通じる。

本書は、「アートする脳」の不可思議さと、これからの脳科学が「超えなければならない壁」を突き付ける野心的な良書である。（東京大学名誉教授）

●A5 272頁 2012 定価3,780円(本体3,600円+税5%) 医学書院刊